

「アメリカン・スクール」の背景

林, 寿美子

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要 / 日本文学誌要

(巻 / Volume)

72

(開始ページ / Start Page)

60

(終了ページ / End Page)

68

(発行年 / Year)

2005-07

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010091>

「アメリカン・スクール」の背景

昭和二十五年一月発行の雑誌『新しい中学校』第十五号に、「成増のアメリカン・スクール訪問記——読書指導の見学を主眼とする——」と題された文章が掲載されている。筆者は当時の東京都雑司が谷中学校長の森一郎氏で、氏が見学した成増のアメリカン・スクールにおける読書指導のカリキュラムについて、詳細な報告がなされている。そこに紹介されている読書指導のための教材や、指導の際に生徒に課するテストの内容も興味深いものとなっているのだが、次に引用するのはその冒頭部分である。

東武線沿線の名所の一つとして成増にアメリカ村が出来ている。戸数約一千、一度その地域に足を踏みいれると、全く変った気分が溢れている。如何にも衛生的で、清潔で、明るくのびのびとした村の印象であるその村の少年少女たちが学ぶ学校がアメリカン・スクールで、筆者はハイスクー

ルの方に刺を通した。見るからに淵酒たる建物で運動場も広い。こんな学校が早く日本の到る所に建てばよいがと先づ羨望が先きにたつ。

林 寿美子

私が森氏のレポートに眼を留めたのは、当時の成増に「アメリカ村」があり、それが「東武線沿線の名所」になつていたという私にとつての新発見もさることながら、ある小説が頭に浮んだからである。それは、昭和二十九年九月に雑誌『文学界』に発表され、その翌年の二月に芥川賞を受賞した小島信夫の小説「アメリカン・スクール」である。

「アメリカン・スクール」は、発表されたのと同じ月に、みずす書房から刊行された同名の短編集に収められた。その「あとかき」で小島信夫は次のように述べている。

「アメリカン・スクール」は、先年成増のアメリカン・

「アメリカン・スクール」の背景

スクールを見学に行ったことがあり、その時に、箸を女教員に貸したことがあった。誰かハイヒールで転んだ人のあったことは、教育庁の人に聞いた。もちろん、この道路上の出来事も、その他、事件らしい事件は、その時には一つも起らなかった。山田は架空の人物だ。僕はこの見学を終戦後二年間ぐらいの所に置いてみて、貧しさ、惨めさをえがきたいと思った。

敗戦後のアメリカ占領下の時代、日本の英語教員の一行がアメリカン・スクールを見学に行く物語、それが小説「アメリカン・スクール」である。そして、この「あとがき」によれば、小島信夫自身、先の森氏と同じ成増のアメリカン・スクールを見学したことがあるという。

情報部隊の一員として勤務した北京で敗戦をむかえた小島信夫は、昭和二十一年三月に佐世保に復員している。その後故郷の岐阜へもどり、県庁の涉外課で嘱託職員として勤務し、同年九月には岐阜師範学校に就職した。いうまでもないが、就職というのは教師としてである。彼は動員前も、英語教師として世田谷区松原の私立日本中学校に勤務していた。岐阜から上京し、千葉県佐原女学校に勤務するのが昭和二十三年四月からである。翌年の九月には東京都立小石川高等学校へ転勤、「アメリカン・スクール」を発表する年である昭和二十九年四月には同校を退職し、三年前から講師を兼務していた明治大学の教授になつてゐる。小島信夫がアメリカン・スクールを見学したのは、岐阜から上京し、千葉での勤務を始めた頃以降であると思われ

る。

実際の小島信夫の見学が、どのように行なわれたのかを知ることが出来ない。小説内のアメリカン・スクール見学は、県庁の学務部による、「承諾を得るため」の「並大抵でない苦勞」により行なわれることになったという。森氏の見学はというと、「東京民事部のステイック教育課長の御親切な御取計らい」により実現したとある。両者の見学はともに、アメリカ側からの指導や強制によるものではなく、日本側からの働きかけによるという点で一致している。

「アメリカン・スクール」が、小島信夫の見学体験をそのままに描いたものでないことは「あとがき」からも明らかであるし、小説内のアメリカン・スクールも、成増にあるという設定にはなっていないようだ。小説内のアメリカン・スクールは、「田舎の県庁」から六キロメートルの距離にあると設定されている。成増から最も近いのは埼玉県の県庁であるが、その距離がわずかに六キロメートルということはありえないからである。埼玉県の県庁は、戦前から現在と同じ場所に建っている。浦和にある県庁と、光が丘地区（後述）の最北端の距離を地図上で計測してみると、直線距離で約九・七キロメートルあり、小説内の設定は事実と違つてゐることがはっきりとわかる。しかしながら、小島信夫が実際に見学した成増のアメリカン・スクール、その見学体験がこの作品成立の重要な要素になつてゐることは間違いないであらう。

彼らがこうしてたどりついたアメリカン・スクールは広

大な敷地を持つ住宅地の中央に、南にガラス窓を大きくはって立っていた。敷地は畠をつぶしたのだ。アメリカ人にとっては贅沢なものとは言えないが、疎らに立ちならんだ住宅には、スタンドのついた寝室のありかまで手にとるようで、日本人のメイドが幼児の世話をしていた。

小説内のアメリカン・スクールの堂々とした姿は、「日本人の誰にもおとらず」「腹」の「へっぺい」る「見学団」とは、鮮やかなコントラストをなしている。アメリカン・スクールは、単なる学校ではなく、森氏のいう「アメリカ村」の象徴であり、さらには、「アメリカン」そのものの象徴として描かれたということが出来るであろう。

この引用の後は、「参観者たちはその日本人の小娘まで、まるで天国の住人のように思われる」と続いている。眼の前の「アメリカ」は、教員達に様々な思いを抱かせる。見学団唯一の女性教員ミチ子は、「この花園では私たちというにんげんが既にもう入りきれないほど貧しくなっているのだ」と、そつと眼頭を押さえる。それに対し、「このような設備の中で教える教育というものが、僕たちに何の参考になるのですか。僕たちは歩いて来ただけで参考になりましたよ。敗けたとはいえてすよ。この建物は僕たちの税金で出来たものです。それを見せただけで涙を流さねばならんですか」と発言する男性教員もいる。

このように、小説のなかでは「花園」、「天国」、そしてそれ故に自分たちのみじめさをつきつけられる場所としてアメリカ

ン・スクールは描かれている。

現在の板橋区成増付近に、「アメリカ村」は存在しない。それは、練馬区光が丘にあたる地域にかつて存在した、アメリカ進駐軍の家族宿舎「グラント・ハイツ」をさすものである。「成増の」というのは、当時最寄の駅が東武線の成増駅であったことからそう呼ばれたものと思われる。現在の光が丘一丁目から七丁目、その跡地にあたるということだ。

グラント・ハイツの正式名称は、「The United States Army Force Housing Area Grant Heights」とい、昭和二十二年三月に命名された。その名は南北戦争の北軍の勇将で、後に第十八代のアメリカ大統領になったユリシーズ・シンプソン・グラントからとられているが、彼は明治十二年に来日して、日本のいたる処で熱狂的な群衆の歓迎をうけたという日本にはゆかりのある人物である。

今われわれが光が丘といつて思い浮かべるのは、団地ではないだろうか。以前は「日本一のマンモス団地」であったそうだが、現在でもその規模は日本有数のものである。建ち並ぶ高層集合住宅群、日比谷公園の四倍の面積を誇るという光が丘公園、総合大病院・警察署・消防署・郵便局・学校・体育館・図書館・清掃工場・大型商業施設など、光が丘はすべての都市機能をあわせもつといわれる。それは、グラント・ハイツの跡地につくられた計画都市であった。そしてさらに歴史を遡れば、進駐軍の家族宿舎になる以前の戦時下においては、そこは日本陸軍の「成増飛行場」のあった地域でもある。

「アメリカン・スクール」の背景

敗戦間もない昭和二十年八月二十四日、数台のジープでアメリカ進駐軍の兵士が成増飛行場に乗り付け、残っていた日本の戦闘機を焼き払ったという。この飛行場は、戦局が激しくなった昭和十八年、農家の土地を収用して建設されたものであった。敗戦後、多くの旧軍事施設と同様に、成増飛行場も進駐軍に接収されることになるのであるが、焼き払われた旧飛行場は、その後しばらく放置されていた。^(註四)二十一年には、旧地主ら一部の呼びかけにより、付近の住民が日本政府に対して旧飛行場の土地を開墾したいと申し出た。食糧難の時代であったためか、大蔵省の許可は比較的容易におりたという。耕作地になったのは、舗装されていない北側の旧補助滑走路である。とはいえ、それは飛行機が離着陸出来るようにつくられたものである。地面は硬く、スコップが曲がってしまうほどであったという。

しかし、苦勞した耕作も一年程度で終止符をうたれることになった。昭和二十二年の春から、グラント・ハイツ建設が開始されたのである。飛行場に残る長い滑走路（コンクリートで舗装された主滑走路）を利用して隊員が自動車で通勤したりするのに便利だということで、進駐軍の家族用住宅地にここが選ばれたのであった。小説内の「広大な敷地を持つ住宅地」とおなじく、グラント・ハイツもまた、住民の「畠をつぶし」てつくられたのだ。住民たちが苦勞を重ねてまきつけた小麦は、一度も収穫されることがなかったという。戦時中は飛行場建設のために農地を追われた住民たちであったが、戦後再び占領軍に土地を奪われることになるとは、皮肉なことである。

敗戦後、焼け残ったビルや大邸宅の多くはアメリカ進駐軍が

接収した。それらのビルや住宅を改修する外に、アメリカ軍の集団家族宿舎の新規建設事業があった。東京都の渉外部は、特別建設事業所を設置してその事業にあたった。その一つがグラント・ハイツ建設である。日本の建設会社八十社と延べ二百八十万人の労務者が動員され、グラント・ハイツ建設は突貫工事に進められた。労務者の駆り集めは大掛かりなもので、早朝の池袋駅前にはグラント・ハイツ行の労務者を乗せたトラックがひしめきあい、夕方のひとときも大混雑をみせた。そうした風景が、しばらくの間池袋駅前の名物になっていたという。

昭和二十二年三月には、建設資材搬入のために東武鉄道上板橋から旧陸軍第一造幣廠練馬倉庫（現陸上自衛隊練馬駐屯地）にのびていた鉄道路線が延長され、啓志線が開通した。^(註五)都営地下鉄大江戸線が開業するずっと以前に、それも、敗戦直後のアメリカ占領下の時代に、光が丘に鉄道が通っていた時期があったのである。上板橋からグラント・ハイツ間の六・三キロメートルを結ぶその路線の名は、グラント・ハイツ建設工事の総責任者であるヒュウ・ケイシー中尉にちなんだものだといわれている。二十二年十二月から翌年二月まで、池袋、グラント・ハイツ間で三十分おきに旅客輸送も行なわれたが、それは連合軍専用のもので、日本人が利用することは出来なかった。

こうして昭和二十三年六月、ゲートと金網のバリケードに囲まれた「天国」、「アメリカ村」が、練馬の中に完成した。総面積は約一・八平方キロメートルという広大なものである。成増飛行場の面積はおよそ一・五平方キロメートルであったから、更に広範囲にわたる土地の接収が行なわれたことになる。治外

法権とされていたため、この地域に町名はなかった。移転してきた軍人家族は千二百世帯といわれる。敷地内には、教会・劇場・郵便局・消防署・自動車修理工場・浄水場・ガソリンスタンド・診療所・美容室・ローラースケート場・ゴルフ場など、様々な付属の施設を有していた。それがあまりにも余裕のある広い施設であったため、日本人には「グラント・ハイツ」と誤解して呼ばれることが多かったという。赤い屋根に白い壁、緑の芝生の庭を有する広々とした家は、敗戦直後、極度の住宅不足にあった東京の人々を羨ましがらせた。もちろんその中には学校もあった。

都立光丘高等学校の公開講座のために編纂された『光が丘学』^(正史)というテキストがある。光が丘の歴史を通観する書籍は他に刊行されておらず、拙稿は同書によるところが大きい。同書に収録されている昭和四十一年に撮影されたグラント・ハイツ付近の航空写真を見ると、広大な敷地にそれぞれの建物が非常に余裕をもって整然と建ち並んでいるため、どこまでがグラント・ハイツの敷地なのか一目で見分けることができる。小説内において、住宅は「疎らに立ちならん」でいるとあるが、グラント・ハイツもそれと同じであったことが一目瞭然である。更に『光が丘学』によれば、「成増のアメリカン・スクール」こと“Grant Heights Elementary School & High School”の所在地は、当時の七百五十六番地と八百六番地であり、グラント・ハイツの中心から北西寄りに位置する。小説内における、アメリカン・スクールが「広大な敷地を持つ住宅地の中央」にあるという小島信夫の設定は、それを象徴的に描くためのものではない

だろうか。

グラント・ハイツでは、一家に一人メイドがつき、上級階級の軍人家族にはボーイや運転手まで雇われていた。メイドやボーイ、運転手の他、ガードマンやエンジニアなど、グラント・ハイツ内で働く日本人の数は、最多時には五千人に達したといわれている。当時の新聞にはハイツ内の従業員募集の広告が度々掲載されたというが、そういった広告に応募し、その将校クラブで働くことになった青年を主人公にした『グラント・ハイツ物語』^(正史)という小説がある。そこにはハイツ内で働く日本人青年たちの日常生活がユーモラスに描かれているが、当然ながらグラント・ハイツはへ小さなアメリカンであり、その内と外では全く違う時間が流れていたことがわかる。従業員の多くは軍人家庭に住み込みか、日本人従業員寮に収容されていた。寮は学校校舎なみの大きな二階建ての建物で、昭和二十三年の開設当初は二十四棟あったという。メイドやボーイの養成所もあって、会話やマナーを教えていた。

立川基地や横田基地へ通勤する交通事情の悪化により、グラント・ハイツに居住する米軍家族は昭和三十四年春頃から逐次移転していくことになる。それに伴い、同年七月には啓志線が正式に廃止された。成増のアメリカン・スクールがいつまでそこにあったのかはわからない。『光が丘学』によれば、昭和三十九年十二月、当時の練馬区長が東京都知事に対しグラント・ハイツ解放と都市計画施設の整備を要請した時には、ハイツ内にはほとんど米軍もいなくなっていたという。前述の航空写真は、もはやほぼ無人になったハイツ上空から撮影したものであっ

「アメリカン・スクール」の背景

た。長年の練馬区住民による運動がみのり、グラント・ハイツの全面返還にこぎつけたのは、昭和四十八年九月のことである。日本政府は、住宅公団などにハイツ跡地を売却しアメリカ車の移転に伴う莫大な費用にあてたため、その土地が旧地主に返還されることはなかった。

小島信夫が実際にアメリカン・スクールを見学したのは、少なくともグラント・ハイツが完成した後、昭和二十三年六月以降であると推定出来るが、二十九年に刊行された短編集『アメリカン・スクール』の「あとがき」にある「先年」という表現には幅があり、見学の時期をはっきりと特定することは出来ない。小説「アメリカン・スクール」内における見学の時期はそれに較べると幅が狭く、先に見たように、「あとがき」には「終戦後二年間ぐらいの所」としているが——これはまだグラント・ハイツの出来上がる以前になる——一方、作品内では「終戦後三年」とあって、これならばグラント・ハイツ完成直後ということになる。

ところで、小説内の「見学団」がアメリカン・スクールを訪問した時期、それはちょうど新学制の実施直後に当たる。

昭和二十二年三月、「教育基本法」および「学校教育法」が制定され、翌月から日本の六・三制義務教育が開始された。その準備期間は米国教育使節団報告書の発表から一年弱、教育刷新委員会による新学制を含む教育改革全般の審議から三ヶ月という極めて短期間であり、まさに「見切り発車」状態での実施であった。新しく誕生した当時の中学校について、海老坂武氏

はその著書『〈戦後〉が若かった頃』において次のように振り返っている。

私は新制中学の第一回生、したがって私の入学した大森六中とは、できたばかりの学校だった。すべての新制中学がそうであったように、校舎もなく運動場もない。校舎は赤松小学校と清水窪小学校の一面を借り、運動場も小学生と一緒に使っていた。固有の校舎、固有の運動場がもてたのは二年生になってから、池上線洗足駅の近くに木造の新校舎とかなり広い運動場がつくられた。(略)

校舎がない、運動場がない、というだけでなく、教育そのものが混乱していた。まず先生がいなかった。いや、先生の数だけは何んとか集めてきたのだが、それぞれが専門の科目を教えていたわけではなかった。

戦災による学校施設の被害は保有面積全体の約十二パーセントに及び、二百万人以上の児童・生徒が学ぶべき教室を失ったが、財政難と資材不足のためにその復旧は遅々として進まなかった。文部省『昭和学制百年史』によると、昭和二十七年年度は国立学校で五十一パーセント、公立学校では四十一パーセントが復旧されたに過ぎず、完全な復旧にはその後なお十年の歳月を要したという。新学制が開始された当初、海老坂氏の入学した大森第六中学校のような状況は、ほぼ全国の学校に当てはまるものであったと推定できるが、旧制国民学校の初等科がほぼそのまま新制小学校に転換されたのに引きかえ、母体となるも

のがほとんどなかった新制中学校の設立は、とりわけ困難を極めるものであった。

六・三制実施のために当初政府が計上した予算は約八億円で、その大半が教員の給与に当てられて消えてしまうほどの額であった。そのため、校舎の建築費については地方自治体が負担しなければならず、小さな村にとつてはまさに死活問題であり、それを苦に自殺した村長が何人もあったという。市町村の教育費の大部分は新制中学校の建築費に当てられたが、それでも発足当初に独立校舎をもつことができた中学校は全体のおよそ十五パーセントに過ぎなかった。教室を一ヶ所に統合できず何ヶ所かに分散したり、二部三部の授業を行なう学校は珍しくなかった。「いざ開校となつて1学級に60人、70人と収容するよりほかにないという例も少なくなつたのである」と回想する当時の中学校教員もいる。小説内では、アメリカン・スクールのウイリアム校長が、一学級七十人という日本の教育を批判しているが、それも決して大げさな数字ではなかつたのである。海老坂氏が中学二年生の年、すなわち昭和二十三年に独立の校舎と運動場をもつたという大森第六中学校は、他に較べると恵まれていた方だといえる。新制中学校発足から五年経過した昭和二十八年一月の文部省の調査結果でも、いまだ仮教室を使用したり、二部授業を行なっている公立中学校は全国で一万余級以上ある。

教員不足も深刻な問題で、昭和二十二年十二月現在の調査結果によると、新制中学校で外国語を担当する教員の約八割が免許状を有していない。意味は少し違うが、現実としては小説

「アメリカン・スクール」に登場する伊佐のように、「英会話が出来ない」英語教師が数多くいたに違いないのである。

校舎・設備・教材・教具・教員など、あらゆる点において新制中学校の設立は困難を極めたが、そのような状況下で「全国の中学校長間の緊密な協調を図り以て中学教育振興上の諸問題を研究討議しその解決促進に寄与するを目的」として昭和二十二年十月に発足したのが全日本中学校長協会であり、本稿の冒頭で紹介した雑誌『新しい中学校』は、同会の機関誌として昭和二十三年九月に創刊されたものである。

新制中学校発足当初はその教育カリキュラムも明確ではなかった。昭和二十二年三月の「学習指導要領一般編（試案）」に続き各教科の要領が文部省から刊行されたが、これは「新学制発足に際し早急に作られたもの」で、各学校の教員はこれを参考に自主的に教育課程を編成しなければならなかつたのである。当時最も参考にされたのは占領国アメリカの教育であり、冒頭に引用した訪問記の筆者である森氏のような研究熱心な教員にとつて、アメリカン・スクール見学は、貴重な機会であつたに違いない。

小説「アメリカン・スクール」では、日本人教員たちが新制中学校の教員であるとは特にことわられていない。「各自その好む授業を覗いていいことになり、彼らは三組にわかれて授業を覗いてまわるが、山田と伊佐とミチ子が参観した「図画の授業」には、「中学一年の男女」がいる。この描写だけから、彼らが中学校の教員であつたと断定することは出来ない。しかしながら、小説「アメリカン・スクール」に描かれたのが、敗戦直後

「アメリカン・スクール」の背景

の教育改革の渦中にいた日本の教師たちであることは間違いない。彼らのアメリカン・スクール見学は、波瀾に満ちた新学期の創生期という背景を有していたのである。

小島信夫の「アメリカン・スクール」は、作品発表の翌年、第三十二回芥川賞を受賞した。その選評において井上靖は、「人間の劣等意識を執拗に追求した作品で、一時期の日本人を諷刺して時代的意義もある力作」であり、「多勢の人間も充分書き分けてあり、一つの作品として纏ってもいるし、ボリュームもある」としている。井上靖がいうように、「アメリカン・スクール」には個性豊かな日本の英語教師たちが登場する。彼らが織りなすこの物語が、敗戦間もないアメリカ占領下における日本の一時代の構図を、諷刺をもって描き出しており、その意味でこれが時代的意義のある作品であることは改めて言うまでもない。私がここに述べたことで作品の評価が変わるわけではない。しかしながら、冒頭に引用した、校長先生による素直なアメリカン・スクール訪問記とならべてみるならば、日本人のみならず、アメリカへの痛烈な批判が込められた小島信夫「アメリカン・スクール」という文学作品の意義が、より明確になるのではないだろうか。

註

一、昭和三年七月にアメリカ陸軍から空軍に移管され、それ以降は「The United States 34th Air Force Housing Area Grant Heights」になった。施設はほとんどそのまま引き継がれたという。

二、グラント將軍が来日した年、仮名垣魯文は「格蘭氏伝倭文賞」（ぐらんどうしでんやまとぶんしよう）を書いている。また上野公園と芝公園の増上寺でグラント將軍による植樹が行なわれたが、それらは現存し、どちらも巨木に育っている。

三、正式呼称は「成増陸軍飛行場」であるが、東武東上線成増駅が最寄のため、一般に「成増飛行場」と呼ばれていた。所在地が「東京都板橋区練馬高松町」であったので、周辺の住民からは「高松飛行場」とも呼ばれていたという。戦局が厳しくなると、「震天制空隊」と命名された隊員たちが「体当り攻撃」（練馬区戦争体験記録——『平成三年八月、練馬区』）をするためにこの飛行場から飛立った。

四、成増飛行場は、元来小型戦闘機と中型輸送機用の飛行場として建設され、滑走路の舗装が二二センチメートルと薄かった。戦後もそのまま進駐軍飛行場として使用される可能性もあったが、アメリカ軍用機が着陸を試みた際、滑走路の舗装がその重量に堪えられず、着陸したとんに滑走路がへこみ事故を起こしたために取りやめになったという説もあるという。（後述の『光が丘学』による。）

五、こうした連合軍輸送の経費は、当初日本政府が支出した。サンフランシスコ講和条約締結後は、進駐軍がその経費を

負担することになったために輸送量は減り始め、昭和二八年七月に朝鮮戦争が停戦になってからは、輸送はほとんど行われなくなったという。

六、加藤竜吾編著、平成二三年一月、東京都立光丘高等学校。同書執筆時において、加藤氏は光丘高等学校の教諭である。

七、能登方恵『グラントハイツ物語』、平成三年一二月、光が丘新聞社。

八、海老坂武『戦後』が若かった頃』、平成一五年七月、岩波書店。

九、昭和四七年一〇月、帝国地方行政学会。

一〇、原正「第一章創成期」、全日本中学校長会編『中学校教育三十年』、昭和五二年一二月、全日本中学校長会。

一一、『教育年鑑』刊行会編『教育年鑑一九五五版』（平成一三年七月、日本図書センター）所載。

一二、森秀夫編著『全国六・三制義務教育の成立』（昭和六三年五月、時潮社）所載。

一三、前掲の『新しい中学校』所載の「全日本中学校長協会規約」。昭和二五年五月、新たに「全日本中学校長会」を発足させるために同協会は「発展的に解消し」（前掲の『中学校教育三十年』）た。

一四、前掲『学制百年史』。

一五、『芥川賞全集』第五巻、昭和五七年六月、文芸春秋。

※小島信夫の著作の引用については、講談社版『小島信夫全集』（昭和四六年四月〜七月）を使用した。

※すべての引用に際し、漢字を新字体に改めた。

【主な参考文献】本文および「註」に掲げたものを除く。

東京都練馬区編『練馬区史』、昭和三年一〇月、東京都練馬区。
練馬区史編さん協議会編『練馬区史』、昭和五年三月、東京都練馬区。

『練馬区小史』、昭和六二年八月、練馬区。

埼玉県編『新編埼玉県史』通史編七、平成三年二月、埼玉県。

『鉄道終戦処理史』、昭和三年三月、日本国有鉄道外務部長

東武鉄道社史編纂室編『RAILWAY100 東武鉄道が育んだ一世紀の軌跡』、平成一〇年三月、ダイヤモンド社。

東武鉄道社史編纂室編『東武鉄道百年史』、平成一〇年九月、ダイヤモンド社。

ドナルド・キーン『明治天皇』、平成一三年一〇月、新潮社。

（はやし すみこ・国際日本学インスティテュート博士後期課程一年）